

# 自閉症児の対人行動

教育心理学研究室 大 貫 敬 一

## The Behavior of autistic children in a strange situation

Keiichi ONUKI

Using Ainsworth-Wittig strange-person strange-situation procedure, 21 autistic children were compared with 16 5-year-olds. The preliminary results suggested that (1) there was no difference between autistic children and 5-year-olds with respect to the amount of physical contact to mother; (2) the presence of stranger had little effect on the behavior of autistic children. However, individual differences suggested that more research is needed to assess attachment patterns or attachment phases of autistic children.

### I 問題 II 方法 III 結果 IV 考察

#### I 問題

自閉症児の対人行動の障害は、発達初期に母親や養育者あるいは治療者との関係を発達させることの困難として現われる。自閉症児に共通する特質として、Rutter (1978)<sup>1)</sup>は、“アタッチメント行動が欠如しており、きずなを学ぶこと (bonding) が相対的に少ないが、そのことは最初の5年間にきわめて顕著である”と述べ、その例として両親の後追いをしたり出迎えをしたりしないことをあげている。また、Ritvo and Freeman (1978)<sup>2)</sup>は、自閉症候群の定義の中で、人と適切な関係をつくる能力の障害として、“Stranger anxiety が少ない”，“重要な養育者との関係を発達させることが少ないか、あるいは養育者に過度の依存を示す。例えば、単に機械的な抱きつきがあるだけで養育者は冷淡に (indifferently), 区別なく (interchangeably) 扱われたり、分離の際、パニックをおこしたりする”と記述している。

これらの記述は、いずれも自閉症児は発達初期に Bowlby (1969)<sup>3)</sup>の述べたアタッチメント (Attachment) を発達させることが困難であると言い換えることができ

るであろう。

本研究の目的は、上記のようなアタッチメント行動の特徴が自閉症児として療育を受けている子供達に共通して観察されるかどうか確かめると共に、今後の研究の対象となりうるような自閉症児の特徴的な行動についての資料を得ることにある。

#### II 方法

##### A. 目的

自閉症児のアタッチメント行動を観察し、自閉症児の対人行動の特質を示すと思われる行動の資料を得る。

##### B. 被験者

###### 1. 自閉症児群

自閉症児は、自閉症児を中心とした幼児・児童の集団治療をおこなっている二ヶ所の通所治療施設 (学園・病院) から、それぞれ13名と8名、計21名 (男児17名、女児4名) が選ばれた。年齢は4:1から7:0で、平均は5:3である。これらの子供達とその母親が組にされて被験者となった。

自閉症の診断は各施設の治療者によるものであるが、Rutter and Bartak (1971)<sup>4)</sup>の診断基準である、1) 自閉症に特有な対人関係の障害、2) 談話及び言語の発達遅滞、3) 儀式的・強迫的現象の3つの観点から被験児

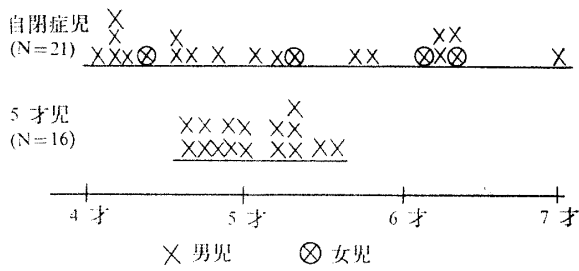


図 1 自閉症児と 5 才児の年齢分布

表 1 場面構成

場面	人	時間	手続き
I.....M, Ch		不定	M, Ch 入室
II.....M, Ch		3分	M いすに座る
III.....M, Ch, Str		3分	Str いすに座る
IV.....M, Ch, Str		3分	Str の働きかけ
V.....Ch, Str		3分	M の不在
VI.....M, Ch, Str		不定	M との再会

M=母親 Ch=子供 Str=Stranger

のプロフィールを述べれば、まず 1) の対人関係の障害については、すべての被験児に対人関係を持つことの困難さが報告されている。2) の言語の発達遅滞に関しては、さしせまった要求がある時のみ会話が成立する子供（反響言語を伴う）が 1 名、反響言語のみが 3 名、その他の 17 名は発声段階であった。3) の儀式的・強迫的現象に関しては、8 名の子供に報告があったが、残りの子供にはなかった。

### 2. 5才児群

対照群として、幼稚園の年少組の 5 才児男児 16 名とその母親が選ばれた。被験児の年齢は 4:8 から 5:7 で平均は 5:1 である。入園後、約 6 ヶ月が経過している。各群の年齢分布は、図 1 の通りである。

### C. 手続き

普通児との比較を可能にするために、アタッチメント行動の測定の研究で繰り返し用いられている、Ainsworth and Wittig (1969)<sup>5)</sup> の strange-person strange-situation の手続きを用いた。

#### 1. 場面構成

Ainsworth and Wittig (1969)<sup>6)</sup> の場面構成の一部を変更して用いた。各場面での手続きは表 1 にまとめているが、より詳細には以下の通りである。

場面 I 母親、子供

母親と子供が入室

場面 II 母親、子供

母親は所定のいすに座る。子供は自由にすることが許されている。

場面 III 母親、子供、Stranger

Stranger がいすを持って入室し、母親と対面する位置の所定の場所にいすを置いて座る。母親と簡単な会話をする。

場面 IV 母親、子供、Stranger

Stranger がいすからおりて、次の 4 種の働きかけをする。

- 1) 「○○ちゃん」と名前を呼ぶ。
- 2) 「これを見てごらん」と自動車の指令カード(女兒の場合は哺乳びん)を見せる。
- 3) 「これ、こうして動くのよ」と自動車を動かしてみせる(女兒の場合は「お人形さんミルク飲むのよ」とミルクを飲ませてみせる)。
- 4) 「これで遊んでいいのよ」とおもちゃを手渡す、またはそばに置く。

場面 V 子供、Stranger

Stranger は働きかけをやめていすにもどり、母親は「待っててね」と声をかけて室を出る。子供が泣いたり、後を追って室から出た場合は観察は終了となる。そうでない場合は Stranger は働きかけをしないでいすに座っている。

場面 VI

母親はドアを開け、「○○ちゃん、いらっしやい」と呼ぶ。子供が退室して観察は終了となる。

### 2. 実験場面

観察は、各施設及び幼稚園の一室でおこなったが、実験場面の標準的レイアウトは図 2 に示す通りである。室の中央に、ビニールテープで直径 1.5 m の円が 2 つ描かれ、一方の円の中心にはいすが置かれているが、そこに母親が座ることになっている。二つの円から少し離れたところに直径 2 m の円が同様に作られており、その中におもちゃがおかれている。室の隅に母親と対面する位置に暗幕がさがり、中に VTR 機器がおかれており、暗幕のすきまから撮映される。なお病院では、ワンウェイスクリーンを通して撮映した。その他合図用ランプ、照明ランプ、マイク等が設置されている。

### 3. 用具

VTR 機器の他、おもちゃとして、電車セット、自動車、人形セット、図鑑、パズル、ひも、木づち。なお、自動車と人形は、Stranger が持って入室する指令カードと哺乳びんによって、より魅力的なおもちゃとなる。

### 4. 教 示

母親には、全場面を通じて子供を自由に行動させ、子供

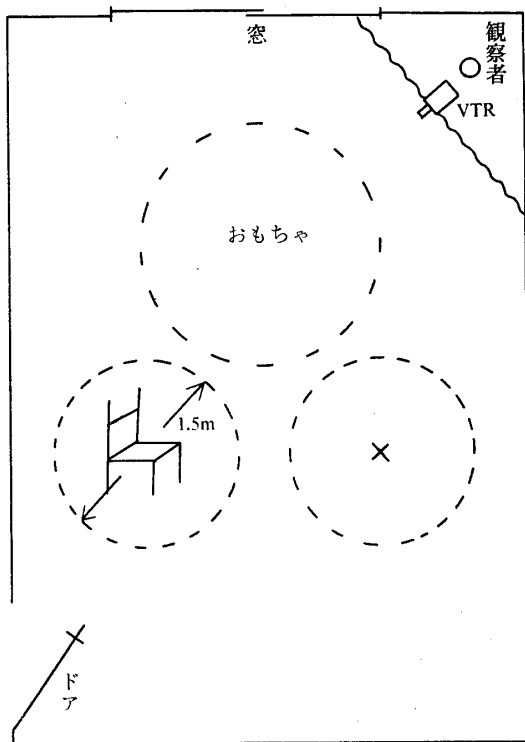


図 2 実験場面

をコントロールしたり、相互作用のイニシアティブをとらないよう、あらかじめ教示した。Stranger となったのは、教育心理学専攻の女性の大学院生であるが同様な教示をした。

D. 分析方法

分析の対象となった行動は、次の四つである。

1. 場面 II, III, IV における母親への近接行動と、場面 II, III, V における探索行動。本研究では、母親への近接行動と探索行動を以下のように定義した。

母親への近接行動……母親が座っているいすを中心とする直径 1.5 m の円内に子供が滞留した場合。または、はっきりした滞留が見られなくても、母親の身体の一部及びその延長としてのいすに触れる行動。

探索行動……おもちゃを対象とするあらゆる種類、水準の行動。

2. Stranger の働きかけに対する行動
3. 母親との分離事態での行動
4. 母親との再会に対する行動

結果の分析は、すべて VTR を再生しておこなった。

母親への近接行動と探索行動は、各場面における行動の頻度を求めた。3 分間の場面は 15 秒のタイムインターバルに分けられ、一つのタイムインターバルで、行動が連続的に、あるいは少なくとも一回あらわれた場合に得点 1 を与え、全部で 12 のタイムインターバルの合計得点をその場面における行動の頻度とした。正確に 3 分間でなかった場面は比例配分した。その他の行動は観察の結果からカテゴリー分けした。

統計的検定は、行動の頻度による群間、場面間の比較には、Mann-Whitney の U テスト、Wilcoxon の T テストをそれぞれ用い、カテゴリーによる群間の比較には  $\chi^2$  テストを用いた。

III 結 果

A. 行動の分析

1. 場面効果

自閉症児と 5 才児の各場面における母親への近接行動と探索行動の頻度を被験児ごとに示したのが表 2 から表 5 である。また、各場面での行動の頻度の変化を群の平均によって示したのが図 3 と図 4 である。

まず、自閉症児と 5 才児とで、母親の近接行動の量に差があるかどうかをみた。各被験児ごとの、母親が存在する場面 II, III, IV での頻度の合計によって両群を比較すると、有意な差はなかった (U テスト, n. s.)。従って、本研究で定義された意味での母親への近接行動の量という点では、自閉症児と 5 才児に違いがないことがわかった。なお探索行動についても、同様に自由に探索することができる場面 II, III の頻度の合計によって比較してみたが、両群に有意な差はなかった (U テスト, n. s.)。

次に、1 才から 3 才までの幼児を対象とした従来の研究では、Stranger の入室によって近接行動が増加したり、探索行動が減少したりする場面効果があることが知られている (Ainsworth and Wittig, 1969<sup>7)</sup>; Maccoby and Feldman 1972<sup>8)</sup>)。本研究においても 5 才児と自閉症児において、そのような場面効果があったかどうか見てみると、5 才児においては、Stranger が入室する場面 III において、母親への近接行動が増加する効果があり (T テスト,  $P=.051$ )、探索行動は減少する効果があった (T テスト,  $P<.05$ )。従って、5 才児においては、それ以下の年令の幼児と同様、Stranger の認知は、アタッチメント行動を活性化させ、探索行動を抑える結果をもたらすと考えられる。それに対して自閉症児では、どちらの行動も Stranger の入室によって変化することはなかった (T テスト, n. s.)。従って、自閉症児では、

表 2 母親への近接行動の頻度  
(自閉症児)

被験児 注 1 No.	場 面		
	II	III	IV
1	5.0	3.0	0.9
2	7.0	12.0	2.6
3	7.0	11.0	0
4	0	0	0
5	0	0	0
6	0	2.0	0
7	1.0	0	0
8	2.0	1.7	0
9	10.5	11.1	9.2
10	0	1.8	1.0
11	2.0	0	0
12	0	0	0
13	4.0	0	0
14	0	0	0
15	0	0	0
16	11.0	11.0	8.6
17	0	0	0
18	9.0	12.0	11.1
19	5.0	12.0	12.0
20	2.2	0	2.6
21	12.0	12.0	12.0

注 1 被験児 No. は年令の高いものから低いものへ順に並べてある。

表 3 探索行動の頻度  
(自閉症児)

被験児 No.	場 面		
	II	III	V
1	6.0	9.0	— 注 1
2	0	0	7.0
3	6.0	1.0	3.4
4	12.0	12.0	12.0
5	12.0	12.0	—
6	5.5	4.0	—
7	11.0	10.2	12.0
8	11.0	8.6	12.0
9	12.0	12.0	—
10	12.0	12.0	12.0
11	7.0	10.0	12.0
12	12.0	12.0	12.0
13	9.0	12.0	12.0
14	11.1	12.0	—
15	12.0	12.0	11.0
16	1.0	10.0	—
17	12.0	11.0	12.0
18	1.2	0	—
19	0	0	—
20	5.5	12.0	12.0
21	0	0	0

注 1 一は被験児が場面 V の始めに退室してしまったことを示す。

Stranger の入室が行動に影響を与えなかったと考えられる。

## 2. Stranger の働きかけに対する行動

Stranger は場面IVにおいて、1) 呼びかけ、2) おもちゃを見せる、3) おもちゃを動かしてみせる、4) おもちゃを手渡すという4種の働きかけをおこなった。これらの働きかけに対する行動を、観察の結果から、1. 反応あり、2. 反応なしの大きく二つのカテゴリーに分けた。反応ありの被験児の数を示したのが表6である。反応があったと認めたものは、1) から 3) の働きかけに対しては、「顔をあげる」「振り向く」などの仕方で「まなざしを向ける」または「向け続ける」場合と、Stranger に近づく行動が見られた場合である。4) に対しては、手渡されたり、そばに置かれたおもちゃに「触れる」場合、おもちゃを「動かす」場合を反応ありとした。この結果から、自閉症児は「○○ちゃん」と呼びかけられることに対しては、5才児と比べて反応性が低く ( $\chi^2$  テスト,  $P < .005$ )、魅力的なおもちゃが働きかけの道具に用

いられるにつれて、5才児と同じようによく反応していることがわかる。

## 3. 母親との分離事態での行動

母親の「待っててね」の声かけと退室の動作に対して、両群の被験児のおこなった行動を観察の結果から、1. 同意と 2. 不同意の二つのカテゴリーに分類した(表7)。  
1. 同意に含まれるものは、「うん」と返事をする。うなずくなど同意の表現をする場合と、まなざしを向ける向けないにかかわらず、同意・不同意を示す反応をしないで、その場にいる場合である。2. 不同意に含まれるものは、不安 (distress) の徴候を示すもの、泣く場合、後追いをする場合である。5才児は全員が同意のカテゴリーに入り、約半数の7名は、はっきりとした同意の表現をした。一方、自閉症児では、後追いをする子供が多く、そのうち No. 21 を除く8名が、そのまま母親に続いて退室した。また、それらの子供のうち3名は泣きだし、はっきりした不安を示した (No. 9, 14, 18)。自閉症児の母親との分離に対する不同意の傾向は顕著であっ

表 4 母親への近接行動の頻度 (5才児)

被験児 No.	場 面		
	II	III	IV
1	0	0	0
2	1.1	4.4	1.8
3	11.0	11.0	10.0
4	1.1	0	0
5	4.0	12.0	1.0
6	9.2	12.0	12.0
7	4.0	12.0	12.0
8	0	0	0.8
9	8.0	2.0	2.6
10	10.0	10.0	12.0
11	0	0	0
12	2.0	4.4	5.5
13	4.0	8.0	12.0
14	0.8	0	0
15	2.0	11.0	4.3
16	1.0	0	0

表 5 探索行動の頻度 (5才児)

被験児 No.	場 面		
	II	III	V
1	12.0	12.0	12.0
2	12.0	7.6	1.1
3	1.0	0	1.1
4	12.0	12.0	12.0
5	3.0	0	12.0
6	2.8	0	0
7	11.2	0	11.0
8	12.0	12.0	12.0
9	12.0	12.0	12.0
10	4.0	4.0	0
11	12.0	12.0	12.0
12	12.0	12.0	12.0
13	6.0	7.0	0
14	12.0	12.0	12.0
15	11.0	11.0	9.0
16	12.0	12.0	12.0

た ( $\chi^2$  テスト,  $P < .01$ )。

4. 母親との再会に対する行動

一人で過ごした3分間のあと、母親がドアのところに現われるが、再会時の反応を観察の結果から、1. 出迎

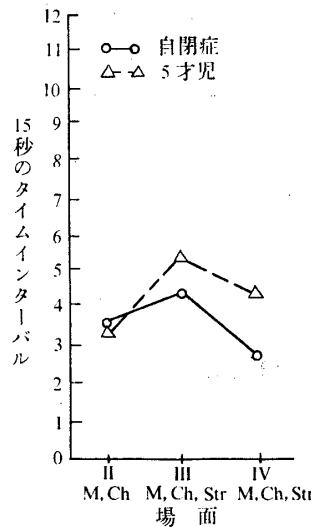


図 3 各場面、各群ごとの母親への近接行動の平均頻度

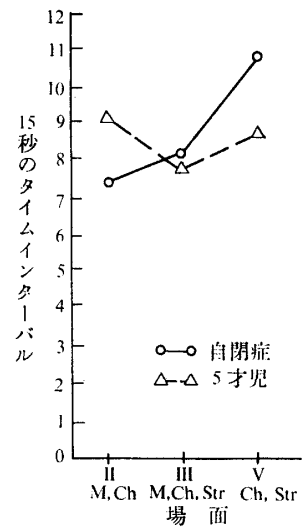


図 4 各場面、各群ごとの探索行動の平均頻度

えと 2. 無関心・抵抗の二つのカテゴリーに分類した (表 8)。1. 出迎えに含まれるものは、呼びかけに対して、すぐに母親のもとに行く場合であり、2. 無関心・抵抗に含まれるものは、再三の呼びかけによって、または母親が手をとることによってようやく退室する場合と、室から出ることには抵抗し、手をとられると泣いたり、あばれたりする場合である。5才児では、多数の子供が、母親の呼びかけに答えて退室したが、自閉症児では、無関心であったり (No. 7, 13, 15, 17)、抵抗する子供 (No. 2, 4, 20) が多かった ( $\chi^2$  テスト,  $P < .05$ )。

B. 行動パターンによるグループ分け

上記の4つの観点についての観察結果から自閉症児の特徴的行動が5才児と比較して明らかにされたが、全場面を通じた行動のパターンを考えると、5才児においても自閉症児においても個人差があり、いくつかの典型的なパターンが見られた。自閉症児の行動の特徴をさらに浮き彫りにするために、それらの典型的なパターンを記述し、被験児を可能な限り分類してみた。

グループ A……Stranger の存在が、アタッチメント行動を活性化させる効果を強く生んだもの。分離後の一人の場面では、母親の座っていたいすに近接し、探索はおこなわない。

5才児群の No. 2 の被験児は、入室すると自動車のところへ行って遊びつづける。母親のもとに行ったのは、おもちゃを見せに行った一回だけである。Stranger の入室すると母親そばに立ち、おもちゃを見ている。1分ほど経過すると再び自動車のところへ行って遊び始

表 6 Stranger の働きかけに対する行動

	自閉症児 (N=21)	5才児 (N=16)	$\chi^2$	P
1) 呼びかけ	7 (N=19) 注 1	15	9.73	P<.005
2) おもちゃを見せる	15 (N=20) 注 2	16	2.79	P<.10
3) おもちゃを動かす	19	16	0.29	n. s.
4) おもちゃを手渡す	18	13	0.03	n. s.

注 1, 注 2 VTR の再生で判定不能なものを除く

表 7 母親の分離事態での行動

カテゴリー	自閉症児	5才児
同意	12	16
不同意	9	0
計	21	16

表 8 母親との再会に対する行動

カテゴリー	自閉症児	5才児
出迎え	4	12
無関心・抵抗	9	4
計	13	16

める。Stranger が自動車の動かし方を教えると積極的に遊ぶ。母親が退室してしまうと、母親の座っていたいすに座って身を堅くして手遊びをしている。一人の場面がおわり、母親がドアを開けるとすぐ出ていった。

このようなパターンを示す被験児は 5 才児に 2 名 (No. 2, 6) いたが、自閉症児には見られなかった。

グループ B……近接行動を全場面を通しておこなっており、探索行動はほとんど見られないか、見られたとしても、母親の領域内でおこなっているもの。

自閉症児群の No. 18 の被験児は、入室と共に母親のひざの上に向かいあわせに座り、自動車に少し触れ、外を見に行くためにひざからおりた以外はずっとそうしている。Stranger 入室後もひざの上ののったままである。Stranger の働きかけが始まると注意深く見ているが、おもちゃが床に置かれると、それを母親のところへ持って行っていじる。母親が退室すると、地団駄をふんで泣きつづけた。

このようなパターンに属すると思われる子供は、5 才児では 1 名 (No. 10)、自閉症児では 5 名 (No. 9, 16, 18, 19, 21) いた。

グループ C……探索行動を全場面を通じておこなって

おり、近接行動は全く見られないか、あっても場面Ⅱの始めに限られるもの、母親との分離事態、一人の場面でも探索行動を続けるもの。

自閉症児群の No. 4 の被験児は、入室後すぐに電車をつなぎ始める。Stranger が入室しても特に意にかけない様子である。Stranger の働きかけが始まると、その方を見て、おもちゃに少しさわるが、すぐまた電車にもどる。母親の退室に対しては少し目で追うが遊びはやめない。一人の場面でも、さらにレールをつなげて遊ぶ、母親が再入室して呼びかけても母親のもとに行かない。一分以上たって、たまりかねた母親が嫌がる被験児をかかえて連れていく。

このようなパターンに属すると思われる子供は 5 才児では 6 名 (No. 1, 4, 8, 11, 14, 16)、自閉症児では 5 名 (No. 4, 7, 12, 15, 17) いた。

#### IV 考 察

観察の結果から、以下の諸点が示唆された。

1. 母親への近接行動の量という点では、自閉症児と 5 才児の間に差が見られなかった。

母親への近接、接触という点で、自閉症児と 5 才児の間に行動の違いがなかったということは、自閉症児のアタッチメントの少なさという臨床的印象の一部を否定するものである。この結果は、自閉症児のおとなへの接近動作 (approach gesture) が形の上では普通児と変わらないという、Hutt and Ounsted (1969)<sup>9)</sup> の観察や、身体的接触の総量では、自閉症児と非自閉症児の間にほとんど差がなかったという Hutt and Ounsted (1970)<sup>10)</sup> の結果、実験状況下で自閉症児が人に対して多彩な行動で働きかけることを観察した石島 (1966)<sup>11)</sup> の結果と一致している。

2. Stranger の存在は自閉症児の行動に影響を与えなかった。

自閉症児が 5 才児と同じ量の近接行動や探索行動をおこなっているながら、それらの行動が Stranger の存在に

よって影響を受けないという結果は, Ritvo and Freeman (1978)<sup>12)</sup> の “Stranger anxiety が少ない” ことと, 養育者を他の人物から “区別していない” (“interchangeable”) という見方を支持するものと考えられる。具体的な行動としては, 自閉症児の中には, 母親不在の場面 A において, それまで母親に対しておこなっていたのと同じ行動を Stranger に対しておこなう被験児が見られた (No. 3, 8, 21)。このような行動は 5 才児には観察されず, 自閉症児の中には, 母親と Stranger を弁別しない子供がいることを示していると思われる。

3. Stranger の働きかけのうち, 自閉症児は呼びかけに対しては無反応の傾向が強かった。

この結果は, 自閉症児が言語刺激に対する反応性が低いことを示している。

4 自閉症児は, 母親との分離の際, 後追いをしたり, 不安を示す子供が多かった。

5. 自閉症児は, 母親との再会において, 無関心であったり, 抵抗したりする子供が多かった。

6. 自閉症児の strange-situation における行動パターンは一様でなく, いくつかのグループに分けることが可能であった。このことは 5 才児においても同様であった。

4. と 5. の結果もまた, Ritvo and Freeman (1978)<sup>13)</sup> の, 自閉症児には, “重要な養育者との関係を発達させることが少ない” 子供と “過度の依存を示す” 子供がいるという記述と一致するものである。

以上の結果から, 自閉症児は, 母親との結びつきを求めるといふ点では他の子供と変わりがないが, 母親とそれ以外の人物との弁別がされていないと考えられる。そのことは自閉症児のアタッチメントの発達段階の低さを示していると予想されるが, また行動パターンには個人差があり, 発達のあり方は一様でないことも予想される。本研究は被験児数も限られており, 予備的・探索的な研究であるので, これらの点について結論づけることはできないが, 今後の研究の方向として, 個々の自閉症児がどのようなアタッチメントパターンを発達させ, どのような発達段階にあるかを探ることが自閉症児の対人関係のあり方を探る上で役に立つと考えられる。

(指導教官 佐治守夫教授)

本論文は, 教育学研究科に提出した修士論文 (昭和 50 年度) を加筆・修正したものである。

(付記)

本研究に協力して下さった子供達とその母親, 指導・助言して下さった治療者, 諸先生の方々, 実験場所の提供を快諾して下さった各施設や幼稚園の責任者の方々, 及び観察の助力をして下さった方々に深く感謝の意を表します。

## 文 献

- 1) Rutter, M. “Diagnosis and definition of childhood schizophrenia”, *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, Vol. 8, 1978, p 146.
- 2) Ritvo, E. R., and Freeman, B. T. “National society for autistic children definition of the syndrome of autism”, *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, Vol. 8, 1978, p 163.
- 3) Bowlby, J. *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. London: Hogarth; New York: Basic Books, 1969.
- 4) Rutter, M., and Bartak, L. “Causes of infantile autism: Some consideration from recent research”, *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, Vol. 1, 1971, p 21.
- 5) Ainsworth, M. D. S., and Wittig, B. A. “Attachment and exploratory behavior of one-year-olds in a strange situation”. In B. M. Foss (Ed.), *Determinants of infant behavior*, Vol. 4, London; Methuen, 1969, pp 111-136.
- 6) Ainsworth and Wittig, op. cit.
- 7) Ainsworth and Wittig, op. cit.
- 8) Maccoby, E. E., and Feldman, S. S. “Mother-attachment and stranger reactions in the third year of life”, *Monographs of the Society for Research in Child Development*, Vol. 37, 1972.
- 9) Hutt, C., and Ounsted, C. “The biological significance of gaze aversion with particular reference to the syndrome of infantile autism”, *Behavioral Science*, Vol. 11, 1966, pp 346-356.
- 10) Hutt, C., and Ounsted, C. “Gaze aversion and its significance in childhood autism”, In S. J. Hutt and C. Hutt (Ed.), *Behavior Studies in psychiatry*, Pergamon Press, 1970, pp 103-120.
- 11) 石嶋徳太郎「自閉症児における人間関係の研究 (その 1) —実験的行動観察—」『児童精神医学とその近接領域』Vol. 8, 1967, pp 437-447.
- 12) Ritvo and Freeman, op. cit.
- 13) Ritvo and Freeman, op. cit.